学べる道具 VOL.25

岡崎むかし館

提灯（ちょうちん）

提灯はろうそくを使いあかりをとる灯火具（とうかぐ）です。ろうそくを使う灯火具は中国から伝来しましたが、上下に伸縮（しんしゅく）し、折りたたむことのできる提灯は日本独自に発達したものです。竹ひごをらせん状に巻いた骨に紙をはって風よけ(火袋（ひぶくろ）)として、中にろうそくを立てて使用します。ろうそくの普及にともない江戸時代に広く使われました。その種類も多く、竹弓の弾力を利用して提灯を上下に張る「弓張（ゆみはり）提灯」、棒先につるす「ぶら提灯」、長い竿の先に張られた「高張（たかはり）提灯」、お店や家の軒につるす「軒先（のきさき）提灯」などがあります。

むかしは街灯（がいとう）も少なく、真っ暗な夜道を歩く時には足元を照らすための必需品でした。特に家紋入りのこうした提灯は、夜間の来客の送迎（そうげい）に欠かせない道具として、提灯箱に入れて常備されていました。しかし、火を使用するろうそくよりも、明るくて安全な乾電池（かんでんち）を使用する懐中電灯（かいちゅうでんとう）が1920年(大正9)に登場すると、徐々に家庭において提灯は使われなくなります。それでも、提灯はあかりをとる灯火具という役割だけでなく、お店の看板（かんばん）代わりの目印として、祭礼（さいれい）・行事に欠かせない道具として、現在でも親しまれている道具です。提灯はむかしの人々の知恵や工夫だけでなく、お祭りの提灯のように、現在の人々の祈りや願いなども伝える重要な道具です。

弓張提灯・提灯箱（丸に九枚笹紋）　岡崎むかし館蔵

＜参考文献＞　『昔の道具』ポプラ社,2013　『日本民具辞典』日本民具学会,ぎょうせい,1997